

年間第三十一主日 C年

ルカ 19・1-10

2010. 10. 30(土)18:30、31(日)7:30

高円寺教会

今日は先ず、いつもミサの中で読まれている日本語の聖書についてお話してみたいと思います。現在ミサで朗読されている聖書は、「新共同訳聖書」と呼ばれているもので、恐らく皆さんのお家にある聖書も「新共同訳」だと思います。この「新共同訳聖書」は、カトリックとプロテスタント双方の聖書学者たちが共同作業で翻訳に当たり、1987年に刊行されたものです。共同で翻訳したから「共同訳」という名前なのですが、この翻訳作業には一つの大きな問題がありました。それは何かと申しますと、人名や地名など固有名詞の扱いです。皆さんもご存知の通り、それまで日本のカトリック教会では、イエス様の名前を「イエズス」と発音していました。これは初めての日本語訳聖書がラテン語聖書から訳されたので、ラテン語読みの「イエズス」が採用されたと言われていますが、プロテスタント教会では当然「イエス」と呼び習わされてきました。他にも「マリア」と「マリヤ」、「ペトロ」と「ペテロ」、「カファルナウム」と「カペナウム」等々。共同翻訳に当たって固有名詞の統一は本当に大変だったようです。結局、イエス様はプロテスタント側の「イエス」が採用され、マリア様はカトリック側の「マリア」が採用されました。よく冗談で「カトリックはイエズスを捨ててマリアを採った」と言われる所以です。

さて、今日の福音の「主人公」であるザアカイ。皆さん、覚えていらっしゃるでしょうか、昔カトリックでは「ザケオ」と呼んでいましたね。私も子供の頃は「ザケオ」の名で覚えていました。今の子供が「ザケオ」なんて聞いたら、恐らくポケモンの一つかと思うでしょうね。で、その「ザケオ」ことザアカイですが、今日の福音に書いてある通り「徴税人の頭」でした。徴税人で名前が出てくるのは大変珍しい、というより、聖書に徴税人で名前まで出てくる人は二人しかいません。一人はこのザアカイ。もう一人は誰だと思いませんか。答えはイエス様の弟子のマタイですね。まあマタイは使徒ですから名前が出てくるのは当たり前ですが、片やこのザアカイ。何故わざわざ名前まで載せたのでしょうか。ちょっと不思議な感じがします。不思議といえば、今日の福音にはもう一つ不思議なことがあります。それはザアカイが「金持ちであった」と付け加えて書かれていることです。この人は徴税人の頭なので、お金持ちなのはある意味当たり前

です。別に書かなくても分かることを何故ルカは書いたのか。ザアカイがどんなにあくどい男だったか知らせようとしたのでしょうか。どうもそうではなさそうです。この不思議を解く鍵は、ザアカイが必死に、木に登ってまでイエス様を見ようとした事実にあるでしょう。この人は確かにお金持ちだった。生きてゆくのに何の不自由もなかった。しかしその心の中に、お金では決して埋めることのできないすき間が開いていたのではないのでしょうか。物質的に満たされてはいたが、心は満たされていなかったのです。そんな心のすき間を埋めてくれる人をザアカイは探していた。もっと言えば、「救いを求めていた」。そこにイエス様がやって来たわけです。ザアカイは必死にイエス様の姿を見ようとしていました。今日の福音に「どんな人か見ようとした」と書かれています。直訳では「どんな人か見るために探した」となります。自分を救ってくれる人を必死に探し求めるザアカイ。その心の内が、わざわざ付け加えられた「金持ちであった」という一言に凝縮されているような気がするのです。

しかし、そんな必死にイエス様を探すザアカイを、イエス様もまた探し求めていたのです。イエス様は木に登っていたザアカイに「ザアカイ」と、名前を呼んで声をかけられます。何故イエス様がザアカイの名前を知っていたのか、その不思議はともかくとして、イエス様はザアカイの名前を呼ばれた。死んでいたラザロに「ラザロ」と声をかけられたように、墓の前で泣いているマグダラのマリアに「マリア」と声をかけられたように。これは肉体、心の区別なく「死んでいた者」が「生きる者」になるための、「命のことば」だったのではないのでしょうか。これこそが「命に召される」、正しく「召命」です。召命とは、自分がみことばを告げ知らせる宣教者として呼ばれること、確かにそうなのですが、その前に、自分自身がみことばを受け、神の命に生かされることなのです。ザアカイは命のことばを受けました。それは彼の心の復活であり、また命のことばを告げ知らせる宣教者としての役割を与えられた瞬間でした。早速ザアカイは宣教を開始します。すなわち、「財産の半分を貧しい人々に施し、騙し取っていたものを四倍にして返す」とイエス様に宣言したのです。

私たち人間はしばしば壁にぶつかり、闇の中をさまよいます。しかしその闇から自分を救い出してくださる方を必死に探すとき、同じように私たちを探してくださっているイエス様との出会いが訪れるのです。今日の福音の最後に、イエス様ははっきりとされています。「人の子は、失われたものを探して救うために来たのである」と。探し求める私たちと探し求めるイエス様、この二者が出会うとき、そこに神様の豊かな命が注がれ、救いの喜びに満たされた私たちは、この「命のことば」を告げ知らせずにはおれなくなるのでしょうか。

探すイエス様に出会うためには、私たちも必死にイエス様を探し求めなければなりません。そこにはいろいろな困難もあるでしょう。現にザアカイはイエス様を探そうとして群衆に阻まれました。しかしそれでも彼はあきらめなかった。木によじ登ってまでイエス様を探し求めた。このザアカイの姿勢、そしてイエス様と出会った後の劇的な変化に、信仰者の取るべき態度とその報いを見ることができます。ルカがあえてこの人の名前を聖書に記した理由は、全ての信仰者の模範としての姿をこの徴税人の中に見出したからなのでしょう。ザアカイは藁ならぬ木にすがりついてもイエス様を探し求めました。私たちもザアカイに負けず、木にすがりついても、たとえ泥まみれになっても、必死にイエス様を求め、神様へ至る道を歩み続けてまいりましょう。

カトリック高円寺教会
助任司祭 林 正人